

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第四部

第二十一章

Name is Meruno

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[21・Name is Meruno](#)

[215.](#)

[216.](#)

[217.](#)

[218.](#)

[219.](#)

[220.](#)

[221.](#)

[222.](#)

[223.](#)

[224.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

エドミール	ポルタアウレア公国の皇太子
X & Y	エドミールのボディーガード
間宮宮司	間宮神社の宮司
ユミコ	通訳

21・Name is Meruno

215.

キリガミネ探訪。

百年前、ベルギーの鉱物学者が日本の神秘的な湖畔ですごしたひと夏をつづった旅行記である。

桧山健から譲り受け、日本行のジェット機内で旅のつれづれにページを繰っていた彼は、ある箇所で、頭を殴られたような衝撃を受けた。湖畔の旧家に住む十五歳の少女。彼女の名は "Meruno"

メルノ。メルノ？ メルノ——！

その音が殴られた頭の中をぐるぐると廻る。

はたして世によくある名なのだ。はるばる海を渡って来た鉱物学者の前に偶然現れたのだ。

そんなことがあるものか！

女性の名ダイアナが月の女神であるように、"メルノ"はかつての世界で音楽の女神を意味していた。ボムソワール・メルノは音楽の女神を体現した奇跡的な少女だったのだ。

『黒い直毛、黒い瞳、水辺にすっきりと立つアイリスのように凜とし』、日本の民族衣装がよく似合うと鉱物学者が描写する少女は、彼が知っている金色に輝く髪と肌のメルノとは違う。だがこんな名前がふたつとあるものか！

一度も訪れたことのない日本へ向かうジェット機の中で、この少女が生きていたという国へ向かう途上で、この名を目にする偶然など、あり得ない。そんな偶然はあり得ないと彼の中の何かが主張する。心が狂おしく "あり得ない" と叫ぶ。あり得ないではないか！！

そして彼は激しく落胆する。

本が書かれたのは百年も前のこと。少女はその時十五歳だった。とうにこの世を去っている。もし
実在したのだとしても、今はもういないのだ。

閉じた赤い布張りの表紙に落涙する。

己がどれほどあの少女を愛していたか、改めて彼は思い知ったのだった。

216.

友よ

友よ

ふたり丘を駆け

可憐なひなぎくを摘んだ日のことを覚えていますか

ふたり小川で水をかけ合った日のことを覚えていますか

あれは遠い昔の日々

もはや丘はなく

小川もなく

可憐なひなぎくは流された

荒海と時とがふたりを隔ててしまった

友よ

さまよう日々も失意の日々も

君を忘れたことはない

夕暮れのひなぎくを忘れたことはない

時は去り 時は来る

幸い君にあれ

友よ——¹

¹ Auld Lang Syne

公用、私用関係なく、エドミールには常にボディーガードが少なくとも二人、ついている。まあ、唯一の次の大公という立場的に、私用だからついてこなくてよろしいというわけにはいかないのだ。

今回の日本行にも二人がついてきた。それぞれちゃんとした名前を持っているが、常にカゲの存在なので、ボディーガードXとYということにしておこう。ちなみに彼らはガード対象者をマスターと呼んでいる。

XとYはマスターにくっついてヨーロッパ各地を訪問してきたが、日本は初めてだった。ごく私的、かつ秘密の訪問なのでXが先に日本に入り、車やらホテルやらを手配し、目的地の間宮神社なる場所をルート含めて事前にサーチするという念の入れようだった。マスター本人は、「ほかならぬマミヤの実家だしそんなに気を使わなくて」と気楽に構えていたが、護衛する方はそうはいかないのであって、彼らはけっこう胃の痛い思いをしていた。

そんなわけだったから、間宮神社の駐車場の隅に隠れるように車を止めて待機し、携帯食でさっさと昼食をとろうとしていたXとYは、車外から「あのう」と声をかけられて飛び上がった。

声をかけてきたのは女性だった。和服の女性。緩く結い上げた髪、涼やかな目でにっこりと笑いかけてきた。そして言った。「お昼ごはん、皆さんの分も用意してございます。どうぞおいでになってくださいませ」英語だったが、ボディーガードたちの脳内ではそのように変換されたのだった。

通された部屋はさすがにマスターとは別だったが、メニューはいっしょだという料理が運ばれてきた。

「当主から皆さんへ、心づくしでございます」

マスターは当主が相手をしているから心配は無用だとも、先刻の女性は言った。

懐石料理を洋風にアレンジした数々の皿にボディーガードたちは目を瞠った。ヨーロッパのどこへ行ってもこんな美しいメニューにはお目にかかれない。新鮮な食材は目にも舌にも、心にも、瑞々しかった。

「どうぞごゆっくり」

彼女が身に着けているキモノは神秘的な青磁の色で、水の流れを思わせる織りが入っていた。帯は象牙色の地に桜が咲いている。無骨なボディーガードたちの心にも水面に流れる桜の花びらがありありとイメージされたのだった。女性はしとやかに礼をし、退出した。

間宮宮司は職業柄、外部の人から相談事を受ける機会があったのだが、どういうわけか、娘のひろが結婚して家を出てからはその機会はさらに増した。インターハイで好成績を上げた選手の実家だということがSNSで広まったからだ、という噂があるがあくまで噂にすぎず、本当のところはわからない。とはいえ、人生相談者が増えたのは確かで、それもどういうわけか、外国人の率が高いのだった。そして宮司のアドバイスが的確だということで評判がよく、相談者はコンスタントに増えているのだった。

宮司は戸惑いながらも、「ついに私の時代が来たか♪」と浮かれているところへ、嫁に行った娘が「悩んでる人がいるの」と言ってきた。聞けば、婿どののいここにあたる人だという。はて、婿どののは天涯孤独だったはずでは？

「それが、彼の亡くなったお母さん繋がりだね……かくかくしかじか」

「ふ～むう、作ったような話だなあ」

「ほんとうなんだからしょうがないじゃない。で、その、本家のエドミールさんは三回も結婚に失敗してるの。三回とも相手の女性のトラブルでね。ぜったいおかしいでしょ。エドミールさんにはちゃんと結婚してもらって子孫をなんとかしてもらわないと、こっちにとばっちりが来るのよ」

「とばっちりって、おまえ」

「ヨーロッパの旧家を継ぐなんて、とばっちり以外のなんなのよ。ウチはだれもそんなこと望んじやいないわ」

ヨーロッパのはずれとはいえ、大公家の親戚という立場にいっしゅん、胸を躍らせた宮司だったが、跡を継ぐとなると、そりゃあ、話と責任は別である。しかも今のところ、立派な跡継ぎがいるというのに。

「だからさ、おとうさん、間宮家だって他人事とはいえないでしょ。桧山家の唯一の親戚なんだから」

「そりゃそうだなあ」

大公家のお世継ぎとの対話に現実味が出てきたころ、娘一家のブリュッセル行きが決まった。エドミール氏も同じ用件でブリュッセルへ行くことになり、物事の歯車が音を立てて回りだした観があった。

「ブリュッセル行った後のことはちょっと想像がつかないわ。もしかしたら、健もエドミールさんも、すごく忙しくなるんじゃないかしら」

「だからその前に、ってことか」

「そ。嵐の前の静かな時にね。うちは無名の一家だけど、エドミールさんはそうじゃない。せめてとうさんのところではゆっくりさせてやってくれない？ 結界張ってるとこに怪しいやつは入れないでしょ。費用は全部うちがもつから」

219.

初対面の相手との会食など、気が張るに決まってるが、彼らは……互いに……初対面という気がしなかった。すでにマミヤを通じて噂を耳にしていたということもあるが、それ以外に、どこかで会ったことがあるという気がしてならないのだ。しかし、いつ、どこで、ということまではわからない。今生でマミヤやヒューダーがすぐにそれとわかったというのとは違っていた。

いつか、どこかで会ったことのある、懐かしい相手だ。緊張も、若干の警戒感も、言葉の壁もすぐに消え去り、ウソのようにうちとけあった。

町の英会話教室に通ってなんとか簡単な日常会話くらいまでにこぎつけていた間宮宮司は、自分の心許ない英語がちゃんと通じる相手だとわかって、心からほっとした。

それでも、大事な話に誤解のないようにと、信頼できる人に通訳として立ち会ってもらっていた。例の、和服の女性である。エドミールは最初、間宮夫人かと思ったのだが、彼女は「interpreter」と、微笑んで首を振った。

「彼女はね、料理をお願いした割烹のオーナーさんなんですよ。なんでも、海外で暮らした経験があたりだというので通訳もお願いしたのです」

「海外というと？」というエドミールの質問に、彼女は「メキシコです」と答えた。

「メキシコ……？」

「はい。暮らしたと申しまして、メキシコシティで、ほんの一年ばかり。水が合わなかったのか、気候が合わなかったのか、わたくし、体を壊してしまいまして、こどもを連れて日本に戻ってきたのです。十何年も前のことですわ」

「……お子さんがいらっしゃる？」

「ええ、交通事故に遭いまして……あら、わたくしのことなどより、だいじなお話がおありなのは？」

「では、ひとつだけ。なまえを教えてくださいませんか」

「ユミコ、と申します」

＊

彼女は……なにか気になる存在だった。間宮宮司にもどこかであったことがあるはずと確信していたが、それはユミコに対しても同じようだった。どこかで会ったことがあって、よく知っているような気がする。彼女からメキシコシティという地名を聞いて、うずくような、なんともいえない感情がこみあげた。そこはかつてのメッサナの目と鼻の先――

220.

メモは取らない、録音もしない、聴いたことはすべて忘れ、口外は決してしない。宮司とユミコの間で、事前にそういう取り決めが交わされていた。実は今回が初めてではない。外国人との会話には、ほぼ、彼女が通訳として同席していた。

彼女がオーナーである割烹は老舗であり、店の評判も従業員の評判も上々で、彼女本人の出自など求めなくても、話しぶり、作法、身のこなし、服装持ち物のセンス、どれをとっても知的で品が良く、『信用ならない』という印象はどこにもなかった。むしろ、間宮神社の評判を高めているくらいで、宮司はこっそり、（よほど徳を積んだ魂なのだろう）と思っていたのだった。

＊

「貴方の過去の人生についてうかがってよろしいかな」と宮司はたずね、ユミコはその通りに訳し、伝える。昼食の後、ほころびかけた桜の花の下を歩きながら。

「私——私の父は、とても大きな帝国の支配者だった」エドミールは簡潔な言い方をした。訳しやすいようにという気持ちがどこかにあった。

「父は皇帝と呼ばれていた。私は彼の後継者であり、副官でもあった。私はバイスロイと名乗った。それは高位の権力者を補佐する者の意であり、本名ではなかったが、私を知る者も、知らない者も、良い意味でも、逆の意味でも、誰もが私に相応しい名だと考えていた。つまり私は、傲慢で鼻持ちならない人間だったのだ——」

話しながら、エドミールはふと間宮宮司の目線に気がついた。宮司は立ち止まって、少し離れてエドミールの左隣にいたユミコを見ている——と、とつぜん、ユミコが体を折るように前かがみになった。顔はぞっとするような灰色、片手の指はきつく折れ曲がっては胸元をかきむしり、口に当てた片手の指の間から液体が——

あまりに突然だったので彼女が嘔吐しているのだと気づくのに数秒かかった。

宮司もエドミールも同時に叫んでいた。「リュウモンブチさん！！」「ユミコ！？」

「どうしなすった！ これはたいへんだ、母さん、おーい、母さーん！！」

屋内にいた間宮夫人より早く、ボディーガードのXとYがすっ飛んできた。マスターその人ではなく和服の美しいレディが苦悶しているのを見て、Yは救急箱をとりに車へ駆け戻る。

宮司は奥さんにおろおろと釈明する。「どうしたんだろう、昼飯にあたったんだろうか」と飲食業者にとって縁起でもないことを口走る。しかし吐しゃ物に目を走らせた間宮夫人は、ユミコがここ数時間ほとんどなにも食していないことを察して、きっぱり首を振って夫の言い分を否定する。

「とにかく日陰へ！」「殿下！ そのようなことは我々が！」「救急車を！」「花柄のベルトを緩めなければ！」「レディにそんなことできるか！」「しかしだな！」「ええい、きみらがとっちらかってどうする！！」

「お父さん！ ユミコさんの緊急連絡先は！？」「あ、そうか、ちょっと待て」、と宮司は懷から何枚か書類を取り出す。「これだ、——え？」「どうしたんですか！」「竜門渚記念病院——」

221.

書類に書かれていたいくつかの電話番号の一番目を呼び出すと、すぐに繋がった。病院の看護師長の個人の番号だったのだ。

「理事長には家族がおられませんので、本人になにかあった場合は、わたしのところへ連絡がくるようになっているんです」と看護師長は言った。

ユミコは竜門渚記念病院の理事長だったのだ。

「何かあった場合って、持病をお持ちだったんですか？」宮司は汗を拭きながら訪ねる。

「いいええ、このところいたってご健康で。調べてみましたが食あたりでもありませんし、なにか——心因性のものではないかと担当医は申しております」

看護師長は自分を囲繞している男たちを見上げた。身長190センチを超えるアーティスト風の外国人が三人。間宮神社から電話を受けた時、救急車が否かという話になり、症状からして救急性はなさそうだと判断した。だいたい病院と間宮神社所在地とでは救急車で往復に一時間以上はかかる距離だった。それで「安静にして、そうっと連れてきてください」と頼んだ。三十分ほどして救急外来にこの三人が現れた時、医局も患者も一時（ひそかに）騒然となった。

三人とも高身長、黒髪、金髪、銀髪と、“超”がつくほどのイケメンぞろいだったから、外国の映画俳優たちか！？ というわけである。

（こんなヒトたちに囲まれたりなんかしたら、たしかに心因性の発作が起こるかもしれないわ）と看護師長は思った。

それから中年夫婦が一组。こちらはどこにでもいそうなふつうの日本人だった。

（心因性とはなあ……）と宮司が考えに沈んでいるとき、エドミールは自分で看護師長をつかまえて話しかけていた。

「ユミコさんに家族はいないと？ いや、彼女はたしか既婚者では？」

あ、ああ、と看護師長はちょっとためらった。言っているものかどうかというためらいだった。あたりをちらりと見回し、小声で答える。（以前は。今はおひとりです）

「この病院は理事長のおばあさまが創始者。一族の者がだれかどうかがおりますので、理事長はここを緊急連絡先にされているんですよ」

222.

深い眠りからゆっくりと浮上しながら、真っ先に意識にのぼったのは、(嵐は?)という問いだった。耳を聳する凄まじい雨音、地を揺るがし震えあがるような雷の音、湖が溢れかえる前代未聞の嵐の中を、遠くへ旅をした——そんなはずはないわ、とユミコは思った。そんな恐ろしい嵐は経験した覚えがない。生まれてこの方、四十年近く、湖の氾濫など記憶にない。それとも——メキシコへ行ってる間にそんなことがあったのかしら——

それはそれで悪夢のような日々だった。連日のように吐き気とめまいと幻聴に襲われた。メキシコへ旅立つ前に祖母がひどく心配していた。「なにかあったら、すぐに帰ってくるんだよ」と繰り返し言われた。それはただの老婆心ではなく、なにか起こることを知っていたのかもしれない。彼女にはそういうふしぎな力があると聞いたことがある。

体調は好転することなく、商社マンの夫を支えるどころか逆に足を引っ張ることになり、ついに「日本へ帰れ」と言われ、幼い娘を連れて帰国したのだった。すると吐き気も目まいも幻聴も、ウソのように消えてしまった。祖母はほっと顔をほころばせ、反対に夫は不機嫌になった。

(ため息をつかれて……あるとき、気持ちが冷えてしまったんだった……)

やがて高校生になったひとり娘は交通事故であっけなく他界、葬儀の段となって、夫は帰国しなかった。会社を辞めて独立した夫が現地に家族をもっていることに薄々気づいてはいたものの、「家はやる。慰謝料がわりだ」と言ってきたときはなるべくしてこうなったのだと、ショックよりも、当然の帰結だと思った。

娘の三回忌を機に、慰謝料代わりの家は処分し、祖母の元へ行き、最期を看取った。その祖母が、生前よく言っていた。「天網恢恢疎にして漏らさず、という言葉がある。神々はなにも見逃さないんだよ。だから諦めちゃ、だめ」

何を諦めるなというのか、ユミコにはわからなかったが。

祖母が遺した仕事はいくらでもあったから生活には困らなかったし、独りは気楽、むしろ晴れ晴れとした気分だったが、時おり、やってくる虚しさはいかんともしがたかった。

それはやがて——なにか忘れている——思い出さなくちゃ——そんな焦燥感のようなものへと変わりつつあった。

＊

軽いノックの音で、はたと我に返った。記憶が混乱している上に、すっかり物思いに沈んでいた。

「あ。目が覚めましたね」ドアを開けて入って来たのは看護師長だった。

「河西さんなの……？」

ユミコは情けない声で言った。腕に点滴が繋がっていたので病院だろうとは思ったがやはりそうだったのだ。

「あたし、どうやってここに？ 今何時？ どうしよう、仕事の途中だったわ！」

しだいに意識がはっきりしてきてしまいには叫んでいた。

「だいじょーぶ、だいじょーぶ、落ち着いて。今？ 午前11時。担ぎこまれて二日経ってます」

「え——」

河西看護師長はてきぱきと脈をとり、血圧を測りながら言った。「正常ですね。もうすぐお昼です、おかゆにしときましようね」

「担ぎこまれた？ 二日経ってる？ 河西さん、あたし、どうしちゃったの？ どうして病院なんかに？ あ——それどころじゃない、あたしったら——」

さあっと血の気が引いた。間宮宮司の仕事を台無しにしてしまった！ いや、ぶち壊してしまったらしい！

223.

「ど——どうしよう——どうしたらいいの——」

「まあ落ち着いてください。えーとね、おととい、ユミコさんを連れてきたひとが、目を覚ましたら教えてくれと、待ってらっしゃるんですけど」

「……間宮さんが？」

「いえ、宮司さん夫婦はひとまずお帰りになってね、外国人の方が残ってらっしゃるのよ」

「え——どうして——」

「直接話したいことがあるからって。待って、今呼び出すから」

「え！ ちょっと待って！ 鏡——」

＊

大慌てで髪を直し、寝間着の胸元をかきあわせているところへ、黒髪の外国人は入って来た。ユミコは、はっとした。彼はひどく憔悴しているように見えたのだ。

彼は呟くように言った。「あなたを、傷つけてしまったかもしれない。話をさせてもらって、いいだろうか」

「あの、あたしの方こそ、間宮さんとのお話の途中でしたのに！ その、とんでもないことを！」

しどろもどろで受け答えしながら、緑色の目を向けられてユミコはどきっとした。そういえばこのひとの名前を知らないのだ。

「馬鹿げたことを言う男だと思われるかもしれない。それでもかまわない。——私は——出会う女性を残らず破滅させてしまうらしい」

「……え？」

「実は、私は三回の結婚経験がある。ああ、今生で、だ。ひとりは登山家、ひとりは女優、ひとりは画家だった。しかし私と結婚した直後に、彼女たちを次々と災難が襲い、ついには再起不能となってしまった。結婚生活も、彼女たち自身の活動も、すべて。一回ならまだしも、三回続いた。さすがにこれはおかしいと思った。

間宮宮司には、その話を聞いてもらいたかったのです」

「……………」

「間宮宮司、彼の娘も数年前に危険な目に遭っている。彼女は過去の人生において私と少々関わりがあって、そのときは、私のせいで危険な目どころか、命を落としている。だが今生の彼女は霊的な視力を持っていた。つまり、超自然の攻撃を仕掛けてくる相手を見ることができ、撃退することができた」

「超自然的な攻撃者がいるのですね？」

ユミコの冷静な問いに彼はちょっと驚き、驚きつつ、うなずいた。

「そうです。私は、攻撃者にも、攻撃の理由にも、心当たりがある」

(……女性……?) 女のカンというものか、なぜかユミコはそう思った。

「あなたが発作を起こしたとき、私は真っ先に思った。もしや今度はあなたに矛先が向けられたのではないかと——」

ユミコは相手の目を見返し、ふるふると首を振った。

「それはちがいます。間宮神社には結界が張られていました。とても強い……。超自然的なモノは排除されていたはず。それに。あたしの発作はあなたとは全く、関係がありません！」

224.

「……何年かにいっぺん、同じ夢をみるんです。初めて見たのは……メキシコシティに住み始めたころだったわ。

泥沼に首まで浸かって、延々と歩き続けるという——泥の匂いや口に入った感触まで、細かなところまでリアルな、とても、嫌な夢。嫌なのはそれだけじゃない。私は追われている。信じていた人たちから裏切られ、中傷され、石を投げられ、もうどこにも居場所はない。放っておいてくれればいいのに、執拗に追ってくる。そして、最後に行き着いたところがそこだった。私はそこで体を失

う。悪意の泥にからまれて、救いもなく、絶望のまま、猛獣の牙に引き裂かれる。細かいところまで覚えてしまいました。そして泣きながら目を覚まして……何日も不快な症状に悩まされて。

間宮神社で、あの時、白昼、あたしは目を開けたままその夢を見ていた——」

「貴女はなにかしたのですか」そうなった原因はあるのかと彼は訊いた。声はかすれていた。

「歌を——歌っただけです」

言ってからユミコはふっと笑った。

「おかしいですね。それだけなんです。私、歌うことは苦手だわ。音痴なんです。だからよけいに嫌な夢なのかしら。

ただ……祖母から言われたことがあります。『私もその夢に悩まされた』、と。『ユミちゃん、おまえは私を継いでしまったのかもしれない』

そういえば祖母も歌というものにぜんぜん関心がなかった。それどころか、嫌ってたくらい……

ですから……あの時のことは、私の問題であって。あなたとは全然関係ないんです！」

ユミコが発作を起こしたのは、彼が己の過去世を語り始めた直後だった。ユミコは自分でも知らないおそろしい記憶を潜在意識の中に持っている。それは一度触れたら確実に心身をおびやかすものだ。彼の言葉の何かが発作のスイッチを押してしまったにちがいない。

ユミコが言うように、『あなたとは全然関係ない』くないではないか。

それはいらぬ心配をしないでほしいという心遣いであっただろうが、同時に明確な拒絶でもあると彼は感じた。

それほど彼女の口調は強く、否定的な言葉の数々は彼の胸に刺さった。

ことに彼女も彼女の祖母も、歌うことに嫌悪感を持っていたとは——

「貴女の、おばあさまの名は——」、と、もう少しで口にするとところだった。もしかしたらユミコは、百年前に十五歳だっためるのの孫なのかもしれない。だがそれを知ってどうする？

これ以上、このひとの前にいてはいけない、と彼は思った。

（やはり私は関わる女性を残らず傷つけてしまう男なのだ——）

21・「Name is Meruno」

22・「Name is Meruno-2」へ続く

あとがき

ここから第四部です。

どこかで書いたかもしれませんが、バイスロイ氏のモデルはフィギアスケートのパトリック・チャン選手です。アジア系の容貌だったのですよ。最初は。

そのうち、この人、インドのマハラジャ風の華々しい格好が似合いそうだなーと思い、今となってはクイーンとかレッドツェッペリンみたいなロックミュージシャンのイメージかなあ、お立場がお立場なので派手なことはさせられません。あくまでイメージです。

さあて、年齢的にアラウンドフォーティの彼とユミコさんですが…どうなるんだろう…心配。

知らない情報かも知ですが、ユミコさんはnanako-fifteen、ⅠとⅡにちょこつと出てきてます。

2025年7月14日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十一章 Name is Meruno

2025年 7月15日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[NEO HIMEISM](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社